

苦勞する人、 重荷を負う人は……

ルカス・ホルステンク

この一年釜ヶ崎に関わって感じたことは、初めに自分の意志でこの地域を選んだのではないが「ふるさと」老人センターの留守役として依頼され、出来るかなあとの不安を持ちながらこの地に身を寄せることにした。今、自分は五十歳になりもう新しい環境に順応していく年齢は越えたかなと思っただが、ふりかえてみると自分の中に大きな変化を見出したのです。

それは特にアシジのフランシスコの精神を生きそれに習うことを自分の生き方としながら生きる保障と安定と安全をある程度作りだした自分の生涯だったのですが、この釜ヶ崎で見たことは食べる、寝る、着る、この欠く

ことの出来ない一日の糧の保障もなく、不安な日々を彼らは生きているその姿に自分の生き方を気づかしていただきました。又社会的発展である文化技術科学経済の向上は必ずしも人間福祉ではなく、一部のわずかな人々の生涯だけがよくなりそれによる多くの犠牲者が出るこの差別も解ってきました。

釜ヶ崎に来てキリストが弱い者の味方をし、弱い者の立場に立ち、その人の仲間になっただけというのを身近かに感じました。やはり弱い者の仲間になるということは自分にも弱さを感じさせられて、この弱さを感じることによって又少しだけでも自分が力ある神に近づくことが出来たのです。

よくあることですが、労働者の乱暴な行動、ことばに出合う時、恐い人々だと思っても、一人一人接しているとやさしく親切な心を度々感じるのです。挨拶一つにしても明るくうれい態度が返って来るのです。ある老人は私にいいました。「私があなたに挨拶するよりも、あなたは私に挨拶してくれる、これはうれしい人だ」と。このことは私もうれしかったです。キリストは「先ず人に平安あれの挨拶しなさい」と。忙しい時、人にかかわ

りたくないと思う時、挨拶しないでそのまま行ってしまふ。後で悪いことをしたと思ひ挨拶しないということは人を無視したことだといふつくづく感じます。

どうすればこの人々に幸せを感じさせることが出来るだろうか。物をあげる、これは一時的なことです。長く続く幸せ確かさ、こういったことを度々考えました。結局彼らに、あなたたちに父が居ると、あなたたちも、あなたたちが帰る父がいる、ふるさとがあるとこの意味で、「ふるさとの家」老人センターの名はふさわしいと思ひました。人は何かに属したいし自分のよりどころがほしいのです。「ふるさとの家」のおやじは天の父だと思ひし、そのことを「ふるさとの家」に立寄る人々に聞かせたり感じさせたりすることによって、彼らの生活に希望とよろこびをもたらすのではと度々感じてます。私も又彼らと同じふるさととはあっても家族がない。ある意味で仲間だなあと思ひ、釜ヶ崎の問題の解決の一部は私なりにその辺だなあと思ひ。解決するために来たとは思ひませんが、ここに居る人々は皆父である神の子であつて、共に生きる自分にとつてもうれいことでは

た。

又釜ヶ崎を好きになったことは、多くの仲間、教派の違いや立場の違いがあっても一つの心で労働者の代弁者となり、行政や国のサーピス機関との中に立って彼らの問題、生きることに関心を持って仲間の働きを見て感謝することが出来ました。参加されたことも又大きなよろこびでした。

私個人の生活になりますが、非常にキリストの生き方、みわざを研究したり、めい想を行ったりして、聖書を理解するためにイスラエルまで出かけたが、釜ヶ崎に来て聖書の今まで解らないことが非常に身近なものとしてとらえることが出来ました。キリストだったらこの人々の中に立って「疲れた人は皆私のもとに来なさい。私は休ませてあげよう」とおっしゃっています。私は何も出来ないから早く帰るようにと度々思いながら話しを聞きました。イエズスは違うと思う。自分のことは全部おいてその人々の問題を取り上げて徹底的にその問題を自分の中に入れました。毎日希望も見通しもない人々に接することによってに愛し考える。自分はまだまだそこまで行っていないことを感じさせられました。大きなもう一つの問題はアルコールです。

泥酔しどうにもならない人々に、イエズスのようにしなくてはと思い、忍耐を持ってゆっくり聞くことにしたのです。彼はやっと誰かに聞いてもらえると嬉しい、全部自分の不満をはきだして少し明るくなって帰る姿を見ることが度々ありました。

今私は釜ヶ崎を去るにあたってただ「さよなら」といってしまうのではなく、自分の置かれた場所で釜ヶ崎の経験を生かし、又ボラティアとして共にかかわりを持って生きていと思う。やはり私たちはキリスト者としてキリストのみことば「労苦する人、重荷を負う人はすべての私のもとへ……」(マテオ十一、二八―三〇)をスローガンとして生きたいと思えます。(フランシスコ会神父)

精一杯

生きる人たち

西上真澄

四月二十六日(火) 曇りのち雨

庭の木の新芽が色よく伸びている。ゴールデンウィークも間近だというのに、熊本は雨ばかり続いている。家の中の仕事を終えて、本など読んでいるところに、土井さんからの手紙が届いた。見慣れていたはずの土井さんの字が、なつかしく感じられる。釜ヶ崎での仕事をやめて約一ヶ月、まだまだやめたという実感はなく、明日にでも釜ヶ崎に帰り、仕事をするような気持ちが出来なかったのだが、「たまには、釜ヶ崎を思い出して、お手紙ください」という土井さんからの手紙を読むとその文字と共に釜ヶ崎をも、なんとなくなつかしいものに思われてきた。

釜ヶ崎希望の家では、ケースワーカーということで二年間働いた。それは働いたと言えらるほど、成果があるものでもなく、確かなものでもなく、訳の解らないものの中での躰きの連続であった。勤め始めた頃は、何から手をつけていいのか解らず、とにかく労働者の話しを聞くことにした。最初はSさんだっただと思う。名古屋で暮っていたSさんは、家族親類とエリート家系の中で、はみ出し者とされ、彼のおばさんが、あたかも姥捨て山に老人を捨てて行くのごとく、彼を釜ヶ崎に連れて

来て、置いていってしまった。Sさんは五十二歳、わたしの父と同じ年齢であった。Sさんはもう一度自分の足で立つために日雇いにしかけた。しかし折からの不況で容易に仕事につけない。背広上下を路上で売った。三〇〇円まで値を落しても買う者はいない。最後には血を売ってお金を作るしかなかった。一般に釜ヶ崎にいる者はクナまけ者クと片付けられてしまう。しかし、Sさんに限らず、皆生きるということには精一杯なのである。

一人一人の労働者と関わり、釜ヶ崎に接することによって、さらに問題を見せつけられる。不当な警察権力、結核と人権無視の医療、暴力団によるピンハネや賃金未払いなどの労働問題、さらには、教育の問題、資本主義の問題、天皇制の問題……と、つきるところがない。そして、このような問題の渦の中で労働者は苦しめられ、自暴自棄となり、体を悪くし、死んでいく。わたしたちには何ができるのかノと問いつづけていく反面、どこかで尻ごみしていた自分自身をも告白しなければならぬ。

釜ヶ崎での二年間を一朝一夕に言うことはむずかしいし、考えれば考えるほど、ク自分

は何をしていたんだクという自責とあせりのような気持ちがかみ上げてくる。ただ、以前にわたし自身が決めつけていたもの、かたくなに守っていたものが、一般常識として信じ込んでいたものが、くずされ吹き飛ばされたような気がする、と同時に自分自身の弱さや高慢さ、又自分の奥にかくれていた根強い差別意識が現わにさせられる体験だった。

それだから、釜ヶ崎を去っているいろいろなことが終わってしまうのではなく、これからがむしろ始まりであり、ク釜ヶ崎とわたしクが一体何だったのか解っていくのだと思える。考えてみれば、釜ヶ崎にもいつ行けるかわからない。希望の家に入りにしていた人たち、越冬委員会の人たち、みんなどうしているのだろうか。明日、さっそく手紙を書くことにしよう。(希望の家 元ケースワーカー)

通天閣

早坂博子

初めて釜ヶ崎に着いた時の事を、昨日の様に思い出します。一年間ボランティアに参加するまで、釜ヶ崎という街の名も、その街の存在すらも知らずにいたのが一年と少し前、そして初めて釜ヶ崎に行ったのが一年前でした。

一ヶ月の事前研修でだいたいの資料、山谷、寿での個別研修で、自分なりに釜ヶ崎をとらえているつもりだったのが、新今宮に着いてク釜ヶ崎クという土地に降りた時、ここは私が今まで生きてきた土地とは違うんだ。何かそう感じさせられる重い空気がそこにはありました。

とても暑い日だったのに、ぶ厚いジャンパ

ーを着こんだ人、ガード下で店をひろげている人、暗いセンターの中に一人ぼつんと座っている人、見てはいけないものを見た、罪悪感を初めて来たその日、感じました。

それから、しばらくして初めて炊き出しに行った時も、それは大きな驚きでした。どろどろの汁の中に米だけが浮いている。不況続きの六月、三〇〇人も人が一杯のおわんを求めなければならぬ現実、まったく信じられない事実でした。なぜそうなったかを、誰もが考えなければいけないのに、知らなくにはいけないだろうに、世の中の多くの人はまったく知らず、その中にはあえて避けている人がいるというのは、あまりに淋しい気がしてきます。

九月の末頃だったと思います。夜間学校が始まる少し前、ある人が「新今宮の駅に着いて通天閣が見えるかとせえへんか？」と話しているのを聞いていて、私は「せえへんわ」と思ったものでした。けれど、釜ヶ崎は本当に不思議な街です。あんなに道に寝ている人を見るのがつらかったのに、いやだったのに、町中が焼酒とホルモンの臭いで、自分の体までその臭いがしみ込みはしないかと思ったのに、コンクリート地獄から抜け出て、山と緑

の中に行きたいと思ったのに、三月の総括研修後東京から大阪に着いて、通天閣が見えた時、本当になんとも言えないホッとした気持ちになれたのです。

たった十ヶ月の釜ヶ崎は、あまりに短か過ぎました。私は釜ヶ崎が抱える本質的な問題は、何もわからなかったかもしれません。けれど、あの炊き出しの行列、あの寒さの中の青カン——冬の青カンが、あれ程までに厳しいとは想像もつきませんでした。毛布も何も持たない人が膝を抱えてうずくまり、がくがく震えている図は、私達の生活からは、信じられないものでありましたし、越冬期間中のセンター前の布団の数は、想像を絶するものでした。——結核患者の多さ、平均寿命が四十五歳という数々の厳しい現実、ただ十九年間大きくなってきた私にとても大きな打撃を与えてくれました。そして、何よりも人の暖かみを教えてもらいました。

名ばかりのボランティアは、むしろ多くの人に出会わせて頂き、学ばされ、多くを教えられました。釜ヶ崎は知った以上、私の中に大きな存在をしめるものになると思います。蛇足ですが、いつも思っていました。南海線で釜ヶ崎の上を素通りしているこの多勢の

人達さえもこの街の存在を知らないのだろうと。知らない誰もが、私の様な機会に巡り会えることが出来ればいいのと思っています。

(一九八二年度ボランティア三六五)

M子さんへの手紙

詫摩 良

すっかり御無沙汰してしまいました。

冬の間は釜ヶ崎にいりびたりと言ったところで、何をするとまもなく、やっと暖かくなって夜間パトロールもなくなったので、いつぞやお手紙のお返事を書くことにしました。貴方は言いましたね。「何故あんなところに行くの?」と。何故そんなことを言うのですか?釜ヶ崎は労働者の街であって決して酔っぱらいや浮浪者の街ではありません。朝の五時すぎ、愛隣センターの前に行ってごらん下さい。小ざっぱりとした服装の、今日も働く

うと目が生き生きとした人達で一杯です。たしかに着ているものもよぶれていて、くたびれた顔をした人が一人もいないとは言いません。でもみんな働こう、働きたいと願っている人達なのです。夕方はまた、一仕事すませて帰ってきた人達が道にあふれる程で、思いのところで御飯をたべたり、お酒をのんだり、おしゃべりをしたり、街全体がむんむんと活気に満ちています。これだけだったら理想的な労働者の街なのですが、たしかに何となくぶらぶらしている人、酔っぱらって道端にねている人が大勢いることも事実なのです。その理由や原因などを考えなければなりません。それがまた別の機会にゆずるとして、何故私が釜ヶ崎に行くかということを書くのでしたね。釜ヶ崎には釜ヶ崎日雇い労働組合（略して釜日労と言います）と言うのがあって、組合員は釜ヶ崎に住み、自分自身も昼は労働者として働き、特に厳寒時は青カン（野宿）する人達のためのおふとんひき、深夜パトロール、早朝のおふとんあげ、労働相談、医療相談、賃金不払いの交渉 etc. と息つくひまもない程働いておられるのです。言ってみれば一日の殆んどを仲間の労働者の

ためについやしておられるのです。キリスト者ならば困っている人、苦しんでいる人、一人一人がキリストなのでですから、その人達のために一日のうちのほんの少しの時間をついやすのは当然のことだと思うのですが、彼らはキリスト者でなくても私達以上に、しかもそんなことを意識しないで愛の実践を行っているのです。冬の間せっせと釜ヶ崎に通って彼等の行為をつぶさにみていると、本当に心から頭がさがります。例えばこんなことがあります。深夜パトロールは夜中の一時からですから、十二時半頃喜望の家というところに集合します。出発を待つ三十分ばかりの間、座ったとたんにひきこまれるようにね入ってしまい、昼間の労働で疲れ切っておられるのがよくわかります。そして一時になると、パツとおきて、私達と一緒に黙々とまわって下さるのです。また徹夜作業の休み時間に走って帰ってこられてパトロールに参加し、すんだら又走って現場へかえってゆかれるのです。私にとってこの貴重な時間をさいて共に行動して下さるこの人達の心はどこから来るのだろうか、と考え込んでしまいます。そして彼等と一緒に、本当に心丈夫なのです。この

信頼感と安心感、それは三百六十五日休むことのない仲間のための彼等の行いの積み重ねの結果なのだ和私一人、うなずいています。もっとも彼らのことを書きたいのですが、時間がなくて残念です。彼等のような人達がいることよるこび、彼等と共に行動することよるこびが、私をして釜ヶ崎に行かしているというのが今日の貴方へのお返事です。では又、時間が出来たらこのつづきを書きます。お元気で。



私たちが、毎日、何げなく使っていることばについて、今しばらくの間、考えてみたいものです。

「ことば」それは、人をなぐさめ、はげまし、力づけます。しかし時として、人をけおしたり、傷つけたり、又、死に至らせる時さえあります。

私は、労働者とかかわりの中で、今も考えさせられ、私自

活動報告・入佐明美

人はパンだけで……

身が生かされ支えられている「ことば」を紹介したいと思えます。

死水

「一人でくらししていると、もし死んだ時、誰からも気付かれなく、四～五日たってから見つかった話しをきくと、不安でたまらない。又誰が死水をとってくれるのだろうか、と考えたら、

とてもさびしくなる」と、四十歳すぎの少し体の弱いWさんが、ポツリとこぼしていた。時々「おれは、路上で、のたれ死すればいいんだ」と言うことばも聞きます。

しかし、人間として、たたみの上で、家族に見守られながらねむるがごとき、安らかな死をむかえるのが、人間としての希望ではないでしょうか。

親切

年をとったおばあちゃんが、ポツポツと歩いてきました。毎朝、早くから、ドヤのそうじをして生計をたてています。つい先日、私が労働者にお世話している姿を見ていたらしいです。そしてしみじみと「人のためにするのは、みんな自分のためなんでしょう。貧しい人、病気の人のために親切にしたら、全部自分に帰って

くるんや。自分のためなんや……」と、言ってくれました。

ドヤの壁

学生のSさんは、ある日ドヤに泊りました。生まれてはじめての経験で、大きなショックを受けました。ドヤの壁に次のよ



うな文字がきざまれてあったそうです。「死にたい。お兄さん、お父さん。オレは、ダメだ。死にたい」「死にたい、死にたい」寝て一じょう、立って半じょうという、せまいドヤで、彼は、何にむかってさげび、うめいたのでしょうか。

ハミガキ

結核という病気をもちながらも、毎日路上で、青カンし、そして誰に対しても、にっこりとほほえみ話し相手になってくれるHさんは、私の活動を、きびしく観察してくれる一人です。

「ライオンが死んでもハミガキは残る//ペンギンが死んでもハミガキは残る//入佐明美さんが死んでも名は残る。そのような活動をして下さいね」と、とってもユニークなことを言ってくれました。

「名は残る」ということは、どういふことだろうか。そのことを考えながら、以前Aさんが私をばげましてくれたことばを思い出しました。

「あなたは、おいらの気持ちは、理解できないかもしれない。しかしあなたの言ってくれたことばと、してくれたい行いは、いつまでも、おいらの心に残っているんだよ。それがおいらを支えたり、はげましたりするんだよ……」と。